映画の小箱

オランダの片田舎で生きる女性、アントニオ。その彼女がそろそろ死を迎えようとする時、これまでの村人たちとの生活を追想する。

『アントニア』

自然の恵みを享受した女の生き方

金丸弘美＝文
text by Hiromi Kanamaru

大地の抱擁を感じさせるような、優雅でおおらかで、なんと力強い主人公だろう。

アントニアの生きる姿は、目の前の小さな人の欲望に左右されない、人が人の都合で作った慣習やならわしに惑わされない、生命そのままの営みの素晴らしさを享受し、そしてまっすぐな自分の生きかたを貫こうとする。

彼女の信念は、まさに大地の自然の、天に授かったそのままのような、根を張った生きかた。それをまったく押しつけることなく、そっとさし示してくれる。

アントニア（ヴィレケ・ファン・アメローイ）が死をそろそろ迎え、その準備に心を整えるところから話は始まる。死を迎えるとはいっても彼女の目には、いっさいの戸惑いも後悔も見えない。おだやかで、自然そのままに委ねるという落ち着きぶりなのである。そして彼女の村での実り豊かだった暮らしが始まった日が、思い出されるのである。

戦後間もなく、オランダの片田舎の小さな村に、アントニアは母の死期が近づいたと知って娘ダニエル（エルス・ドッターマンス）を連れて戻ってくる。

母の葬式を無事に済ませたアントニアは、生家で住み始める。畑を耕し、牛から乳をしぼり、大地の恵みを存分に享受する毎日だ。

アントニアの村の評判は決してよくない。放蕩娘と陰口をたたく人もいる。しかし、彼女は一向に気にする様子はない。村にはいろんな人がいる。お互いに思い合っているのに宗教の違いで一緒になれない一階の男と二階の女。女は満月の日に月に向かって悲しく吠える。〝そして曲がった指〟といわれるショーペンハウエルとニーチェを愛する男などなど。

ウスノロという背の高い男は、一輪車を押しているところを子供たちにからかわれる。通りがかりに、その様子を見たアントニアは、子供を木の枝にひっかけて、からかうことを戒めた。以来ウスノロはアントニアを慕い、彼女の家に仕事を手伝いにくるようになる。

五人の息子を抱え妻のいない農夫のバスは、アントニアが気に入り、いそいそと結婚の申し込みにやってくる。結婚の理由を「息子に母が必要なんだ」と言うと、アントニアは「私には息子は必要ないわ」と答える。結婚はしなくとも食事がしたければ来なさいとアントニアに言われ、それからバスは彼女のもとをたびたび訪れる。やがて子供たちとともに訪れ、バスが自分の本当の気持ちをアントニアに伝えられたときに、アントニアはバスとベッドを共にするのだ。

村の娘ディディは父や兄にいつも虐待されている。アントニアはある日、兄ピッテがディディをレイプしようとしたところを目撃し、アントニアはピットを追い払いディディを助けた。それからディディはアントニアの所へやってきて、ウスノロと愛しあうようになり、結婚した。

やがてアントニアの娘ダニエルは成長し、美術学校へ行った。卒業すると「子供が欲しい。でも夫はいらない」とアントニアに相談する。アントニアは娘とともに相手を探しに出掛けて、いつも子供がお腹にいるレッタと知り合い、彼女の親戚でハンサムなバイク乗りの青年を紹介される。こうしてダニエルは子供を得た。

このことは村の神父に知れることになり、自墜落と非難される。ところが、神父も若い女の子にちょっかいを出していて、それをアントニアに目撃され、前言を撤回。なんと神父は教会から離れ、アントニアの家にやってくる。そればかりではない。レッタも子供連れで、アントニアの家にやってきた。

こうして家族は膨らんだ。まるでアントニアを核に新たな村が生まれるかのようだ。

やがてダニエルに孫が生まれ、村人にも死を迎える人も出始める。それでも、アントニアの生活は少しも変わることがない。

彼女の暮らしは、慎ましい。乳をしぼり畑を耕し、その土地にあった、自分たちの背丈にあった営みを存分に育む暮らしだ。アントニアのもとに訪れる仲間たちと収穫の労働を共にし、食事を楽しみ、喜びも哀しみも分かち合う。その天の恵みにそった暮らしのなんと豊かで、しかも雄大に見えることだろう。彼女のような存在を知れば、村の人だけでなく、だれもが愛さずにはいられないだろう。

アントニアが哀しみに暮れたディディに言う言葉が印象的だ。「命にはダンスがある。ディディ、命は生きる定めなの」 ♪

『アントニア』
(オランダ=ベルギー=イギリス/エース・ピクチャーズ) ANTONIA
監督=マルレーン・ゴリス
出演=ヴィレケ・ファン・アメローイ/エルス・ドッターマンス/
フェールレ・ヴァン・オファロープ/ドーラ・ファン・デル・グリーン/ヤン・デクレイル
岩波ホールにて7月5日よりロードショー